

# 中央アフリカ共和国の自然と人

小村幸二郎

## 「アフリカ」の語源

厚い雲の切れめから素顔をみせるピレネー山脈の雪山きびしい冬に閉ざされたヨーロッパを飛び発って あくまでも碧い地中海を過ぎると そこには あまりにも光に満ちた重畳たる峯が連なる。断崖をなして地中海の南を限り 海拔4,165mのツプカル山を 主峯とするアトラス山脈である。そして 3,000万 km<sup>2</sup> にわたるアフリカ大陸は ここからはじまる (第1図)。

「暗黒大陸」と形容されることもあるアフリカ大陸の北端部に位置するチュニジア共和国は アルジェリア民主人民共和国から続くアトラス山脈の東端部に当り もちろん 中央アフリカ共和国とは直接の関係はないが アフリカを知ろうとする人や アフリカ大陸に旅する人にとっては 歴史的に無視できない一つの重要な存在である。しかし 現実以外に興味を抱かない人には あるいは まったく無縁の存在かもしれない。

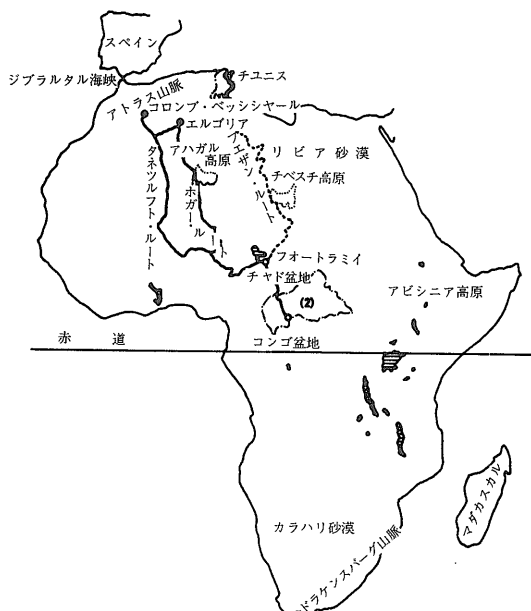
地中海東岸の中部に商業都市国家群を創立したシリア系セム族のフェニキア人が 紀元前2,000年末期から地中海中継貿易に活躍したこと 彼等が作った22の音記号からなるアルファベットが西洋文字の源になったことを 読者はすでに知っているだろう。

いつの時代にも 富を貯えた心の貧しい者が 己を過信し 己の欲望に酔いしれて 次に目ざすのは その富を基盤とした権力の座である。商を業とするフェニキア人もその例外ではなかった。そして 紀元前1500年フェニキア人は チュニジア地域にその食指をのぼし 遂に この地に「カルタゴ王国」を建設した。しかしこの王国は 地中海を隔てて相対峙する古代ローマ帝国と相容れるわけがなく 地中海の覇権を賭けて 紀元前264年から146年にかけて三度 古代ローマ帝国との間に 壮烈な戦を演じた。これが史上有名なポエニ戦争であり 第二回の戦で有名を馳せたのが カルタゴの猛将として知られるハンニバルである。だが エトルリア人の圧政からようやく独立を勝ちえた新興ローマにとっては 商業民の集団はもはや敵たりがたく 1世紀以上にわたるこの戦によって カルタゴ王国が得たものは滅亡以外の何ものでもなかった。この頃 古代ローマの歴史家たちは カルタゴ人を「アフリ」と呼び カルタゴ王国を「アフリカ・テラ(アフリカの土地)」と呼んでいたという。これがアフリカの語源である。

もしも フェニキア人が 商業民族として古代ローマ帝国との共存を計り これと矛を交えることがなかったならば この大陸がアフリカと名付けられるようになったかどうかは疑わしい。しかし私は カルタゴ王国と対立する古代ローマ帝国の人々が呼んだ「アフリカ・テラ」という言葉の中に 商業民族が領有する地への古代ローマ帝国の憧憬と欲望とが潜んでいるように思えてならない。いつの日も波静かな地中海 それは ヨーロッパ大陸とアフリカ大陸とを隔てる自然の偉大な造形であり 交通の要衝であり そして 紺碧の天との間に無数の島を浮べる無上の景勝の地である。しかし その美しさの中に 権勢に魅せられた強者の または 権力と欲望とをむき出しにした民族集団の この海の制覇にかける夢と策謀とがかくされていることを 何人も否定することはできない。これは 古代から現代まで そして 遠い未来においても 悠久の歴史の流れの中に果てることのない 人間の醜いドラマの一つであろう。

## 哀れな種族

アトラス山脈を過ぎると 眼下の風景は一変して 荒

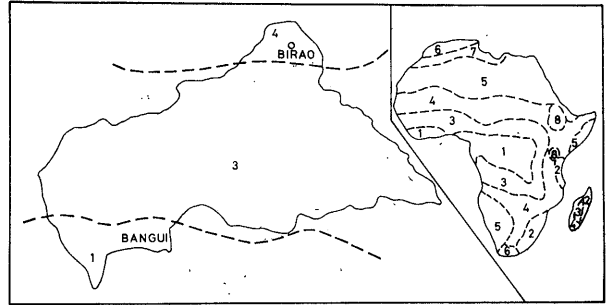


第1図 アフリカの地勢およびサハラ砂漠横断ルート  
(1) チュニジア共和国 (2) 中央アフリカ共和国  
黒丸はルートの基点

涼たる砂漠に変わる。およそ750万 km<sup>2</sup> の面積を占める世界最大のサハラ砂漠である。この砂漠の名はアラビア語のサフラ（荒地）を語源とし、アフリカ大陸の北緯 15° 以北全体を指す。アフリカ大陸北部にほぼ東西に延びる砂漠のうち、西側をサハラ砂漠、東側をリビア砂漠と理解している人が意外に多いようであるが、その名の由来から考えても両者を区別することはもちろん適当ではなく、リビア砂漠という名はサハラ砂漠東域の一部の別名であると考えるべきである。この荒涼とした大地に、ゆるやかに波うつ灼熱の砂の海の果てしてもない拡がり、一きは高いアハガル高原の荒々しいたざま、いは、実に不気味であり、そして、何もをも寄せつけまいとするきびしさを見せている。しかし、人間の未知へのあくなき探究心とより豊かさへの願望は、この途方もなく大きな砂漠にもそそがれ、地中海沿岸からこの大砂漠を越えて、中部アフリカへ旅する人も決して稀ではない。だが、この大砂漠を南北に貫くルートはタネツルフト・ルートとホガー・ルート、フェザン・ルートの3本だけであり、長い年月を費やして開拓されたこれらのルートの旅は、想像以上の困難を余儀なくされる（第1図）。

アラビア半島のルブ・アル・ハリ砂漠といい、このサハラ砂漠といい、確かに不毛の地ではあるが、現在はかつての死の世界とも形容すべき大地から、生ある世界へ移り変わりつつある。氷河をはるかに南方まで下っていた旧石器時代の後期、紀元前5000年頃のサハラ砂漠は、現在とは様相をまったく異にした、水にも緑にも恵まれた人類の豊かな生活の場であった。そして、紀元前3000年頃から、氷河の北上によって、高温乾燥の地になり、ここを生活の場としていた人々は、北部あるいは南部へ、新しい生活の場を求めて移住して行った。その後この大地に訪ずれたものは、自然のきびしさにさいなまれた砂の海と焼けただれたような肌もあらわな岩山、そして、死の世界を想わせる不気味なまでの静寂である。長い年月にわたって息絶えていたようなこの砂漠が、徐々にではあるが、息を吹き返しつつあることは確かである。だが、それは、あくまでも近代科学を駆使する人類の英知と努力の過程と結果であり、豊かな緑におおわれていた遠い昔のような自然の意志ではない。

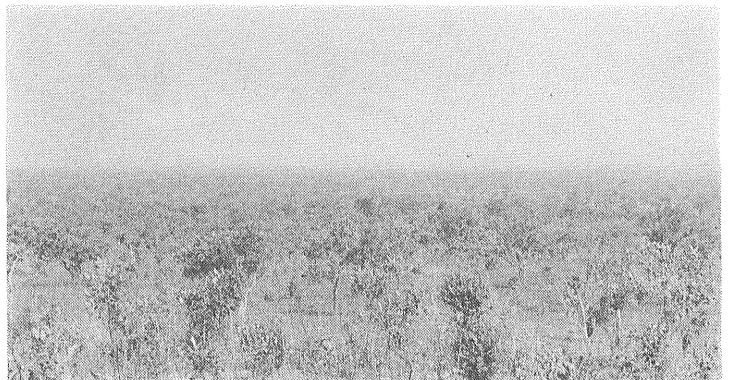
サハラ砂漠を越え、せまく東西にのびるステップ気候区を過ぎると、いよいよ



第2図 アフリカ大陸および中央アフリカ共和国の気候区  
 1. 熱帯(赤道)雨林 2. 湿润熱帯(1に類似)  
 3. サバンナ 4. ステップ  
 5. 砂漠 6. 地中海気候  
 7. 乾燥地中海型 8. 高山植物帯

アフリカ独特の猛獣地帯であるサバンナ気候区に入る（第2図）。稲科の雑草が生茂り、真紅の花をつけた火焰木、前衛華道を志す人ならば思わず生睡をのみそうな幹と枝の不思議なアンバランスを示すバオバブなどが点在する雄大な風景、これぞまさしくアフリカである（第3図）。

サバンナ気候区の南には熱帯（赤道）雨林気候区が拡がり、そこにはピグミー族やゴリラの生活の場である深い密林がある。これらの気候区が、赤道直下のコンゴ盆地を中央にして、アフリカ北部と南部とでまったく対象的な分布をしているのは、実に興味深い現象であるが、これらの気候区というよりはむしろ、熱帯雨林地帯の密林と砂漠に住む人間の哀れな歴史を知るとき、いしれぬ怒を覚える。パンツ族やスーダン族などに追われて今は密林の奥深く秘やかに生きるピグミー族、かつては緑豊かな大地を生活の場としていたものの白人や他の種族に追われて、今は乾ききったカラハリ砂漠だけに生きるアフリカ最古の種族ブッシュマンに、人々はどれほどの善意を注いでいるだろうか（第4図）。



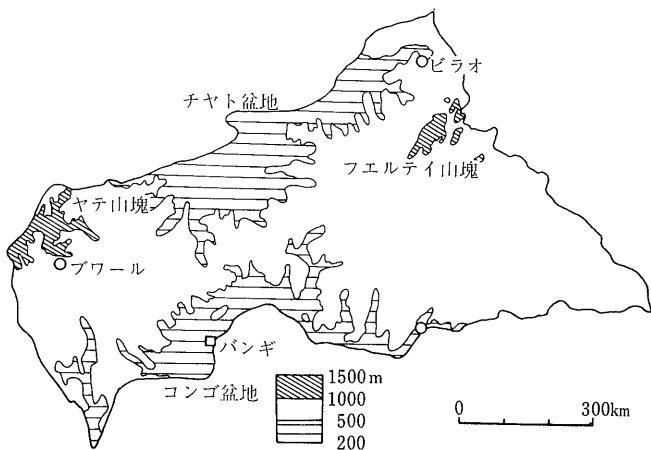
第3図 チャド盆地のサバンナ 稲科の植物と高さ3m前後の灌木が茂る。この付近のサバンナは象・キリン・サイ・その他大型猛獣の密集地帯として有名である。



第4図 アフリカの人種分布概念図(河出書房アフリカの付図から作成 一部訂正)  
 1. 黒人種型(メラノ・アフリカ人種型)  
 2. ネグロ人種型(ピグミー人種型)  
 3. コイサン人種型(ブッシュマン ホツtentott)  
 4. エチオピア人種型 5. 白人種型  
 6. 蒙古人種型  
 直線はおもな種族の分布延長とその方向を示す。

彼らの歴史は この広大なアフリカ大陸における動物社会の弱肉強食による自然の節理の人類版であるといえ、ばそれまでだが それにしてはあまりにも悲しすぎる。

しかし 長い歳月にわたってそうした生活を送ってきた彼らには 今は恐らく 己の手で己の住む社会を毒しつづけているいわゆる文明社会を拒否こそすれ それに対する羨望などというものは露ほどもなかるう。自然に生きる者の幸福は あくまでも 自然の意の中にあっ



第5図 中央アフリカ共和国地勢図

てこそ真実である。

### 中央アフリカ共和国の自然

中央アフリカ共和国は 北東部のスーダン共和国との国境に近い最高1,420mのフェルティ山塊と北西隅の最高1,400mのヤデ山塊を除けば 海拔500~1,100m 平均約650mのゆるやかにうねる高原の国である(第5図)。

この高原は北方のチャド盆地と南方のコンゴ盆地を分かち その分水嶺は 海拔800m前後のいくつかの峯を経て 北東々ー南西々方向に走っているが これら両盆地間を自動車旅行したとしても ルートによっては この高原が分水嶺になっているとは気がつかないほどのゆるやかな地形である。一般に地質・地質構造・気候の差異などにもとづく地形的特徴が著しい。先カンブ



第6図 北方の町ンデレ付近の中生層 ほとんど砂岩層と礫岩層とからなり 水平ないし5°前後に傾斜する。層理はきわめて明瞭であり 偽層理の発達はやや著しい。ダイヤモンドを古漂砂礫床として含んでいる。

リア期の諸岩類をほとんど水平におおって分布する中生層によって形成されている海拔700m前後の台地(第6図) 複雑な地質構造と無関係ではないフェルティ山塊およびヤデ山塊の存在 北部地域でしばしばみられるモノドノック・ケスタ地形・断崖などがラテライト化作用の著しい南部地域でほとんどみられないことなどはその好例である。また 新生代の堆積物によって形成されているチャド盆地の大平原は地質を反映する地形の代表例であり 当国最大の猛獣地帯である。

地形が比較的ゆるやかな割には河川の発達が顕著であるが これらの中には 乾期には完全に涸渇するものがあり また 雨期には著しく増水して交通を杜絶させるものがある。北流する河川は チャド湖に注ぐシャリ川に合流し 南流するものはコンゴ川の支流であるウバング川に合流する。無数に発達するこれらの河川は確かに水量が豊かであり 北方の砂漠地帯に住む人々からは 恐らく 羨望の眼でみられていることだろう。しかし いかにも河川の発達が良いかつ 水量が豊かであっても いつの場合にも それが人間の生活に直接に大きく寄与するとは限らない。ゆるやかな地形という前提条件の下では いかにも水量が豊かであろうとも急流とはなりがたく どの川を見ても 水の流れを疑いたくなるほど静かなたたずまいである。したがって水深が浅く ジープ1台を乗せただけのフェリーボートでさえ 底がつかえて ままにならないことがある(第7図)。丸木舟を除くいわゆる商業船舶の航行が可能な河川がバンギから下流のウバング川とバタンガフォから下流のオウワム川だけであるといったら これを素直に信じてくれる人がどれほどいるだろうか。しかし これは事実である。

中央アフリカ共和国の気候は 12月から5月までの乾期と6月から11月までの雨期とに大きく区別されるが 南北方向に短い国土にしては変化に富み 気候区分上北東部のステップ(スーダン-サヘリアン)気候区 中央部のサバンナ(スーダン-ギニア)気候区 南部の熱帯(赤道)雨林(オウバングイアン)気候区に区別される(第2図)。激しい雷雨を伴うことの多い雨期でも 11月に入ると降雨日数は減り また 乾期中でも 西部や南部ではかなりの雨量がみられる。年間雨量は 北部では平均1,200mm 南部では1,800mm もっとも涼しい12月の平均気温は 21°C もっとも暑い8月の平均気温は31°C 年間平均気温は26°Cである。しかし 気温は 気候区によって また 同一気候区内においても場所によって 相当に異なり 首都バンギでは 最高42°C 最低7°Cが記録されている。筆者がバンギを訪ずれたのは1月10日の朝であったが この頃と2月初旬および4月初旬とは 気温・湿度ともにほとんど変わらず 気温は 35°C 前後 湿度は70%以上であった。したがって バンギでは 夜中さえ 湿度が高いので 美しい星空をみることはなかった。

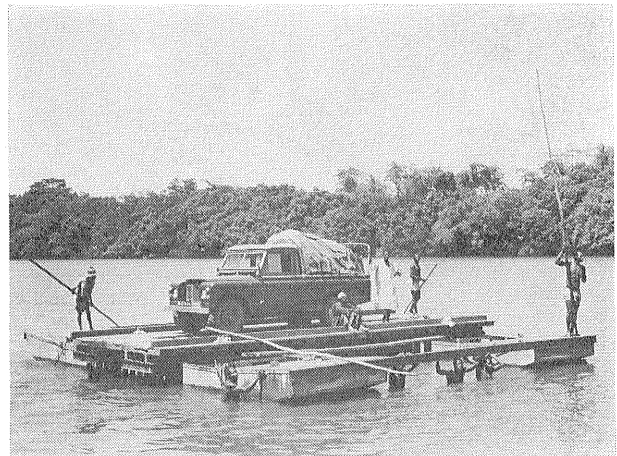
この国の北東部は チャド共和国の中央部付近を北方限界とするステップ気候区の乾燥限界に当り 湿度は低く そして 日中の暑さや日中と夜間との気温差はきび

しく 気候的には砂漠気候に類似する。したがって この気候区では 降雨量が草の育成には十分であるが 樹木の育成には不十分であるため 植生は背丈の低い草で特徴づけられている。

ステップ気候区の南側のサバンナ気候区は 他の気候区よりも乾期と雨期との区別が明瞭ではあるが 北緯6°線より北部と南部とでは 気温・湿度ともに若干異なり 北部はステップ気候区に 南部は熱帯雨林気候区に似ている。この気候区は 広大な草原によって特徴づけられていると思われがちであるが 先にも述べたように 一般に 稲科の雑草と点在するパオパブ・アカシアなどを代表的な植生とする。しかし 大きな河川沿いには 熱帯雨林気候区に繁茂していると同種の巨木や蔓類が茂っている。バンギ付近から南部は コンゴ盆地を中心とする熱帯雨林気候区に属するので 気温は高く しかも 乾期でさえ豪雨をみる事が少なくないほど温度が高いので 植物の育成にはもっとも適している。したがって この気候区の全域が密林におおわれている。

おもな植物は油椰子・夾竹桃・竹・シダ・蔓類・オペシュ・ケイボック・サペル・マティール・イロコ・ムクルング・ドウスイ・オロン・ピリンガ・マホガニなどであり バンギ西方のムバイキ付近には黒檀が茂っている。パパイヤ・マンゴ(第8図)・バナナ・パイナップルなどはほとんど全土に成育しており また サバンナ気候区の中央以南に主として成育するドンゴと呼ばれる蔓の一種は 多量の水を含んでいるので 飲料水の供給物として珍重されている(第9図)。

地形・気候・水系の発達とこれらに関連する植生の相違は野生動物の分布にも大きな影響を与えている。多種多様の猿・イボ猪・鹿・アンチロープやホロホロ鳥・



第7図 ブリア南方のコットー川の渡し 川幅は400m前後 水量が豊富で傾斜がゆるやかなので 土砂の堆積が著しい そのためフェリーの底がつかえて 人足に押ししてもらわなければ渡れない

野鴨などはほとんど全域にわたって分布しているが 大型動物は北部・南部および中央部の一定地域内にほぼ限って棲息する。とくに 北端部のビラオ付近から西部のパミンギ・バンゴラン地区の平原はこの国の代表的な動物地帯であり 乾期におけるこの地帯の動物密集度はケニア共和国やウガンダ共和国などの禁猟区のそれに匹敵するといわれているが それらが人間になじみのうすいという点では これら両国をはるかに凌駕する。

南部の密林地帯は長鼻族の密集地として知られ 北部地域の象よりも巨大な牙をもつ象が棲息していることで有名であり その数は約500頭といわれている。密林地帯には 象のほかに 密林特有の動物がおり とくにゴリラ 密林アンチロープとして知られているボンゴ・レイヨウ シチュトンガ・レイヨウ ヒロシエールなどは有名である。

この国のおもな野生動物は 次の通りである。

象 河馬 キリン ライオン 豹 犀 ハイエナ チータ 猿  
チンパンジー ゴリラ 野牛 縞馬 長脚山猫 鹿 猪 ボンゴ・レイヨウ エランド・ダービー・レイヨウ 黒レイヨウ  
シチュトンガ・レイヨウ コブ・ド・プユフォン・レイヨウ  
コブ・デファサ・レイヨウ コブ・ルダンカ・レイヨウ ダマリスク・レイヨウ 黄背・セファロフ・レイヨウ ビユバル・レイヨウ ギブ・レイヨウ グラン・クードウ・レイヨウ ヒロシエール 鱶

最古の象が 夢を食うといわれるバクに似た 始新世のメリテリウムであり これが 時代の移り変わりとともに 門歯と下アゴが発達し 次いで 門歯が異常に発達して牙となったのに反して 下アゴが短くなり 遂

に 現存する象となったことを知っている人は多いが 象の生活状態を知っている人はどれほどいるだろうか。

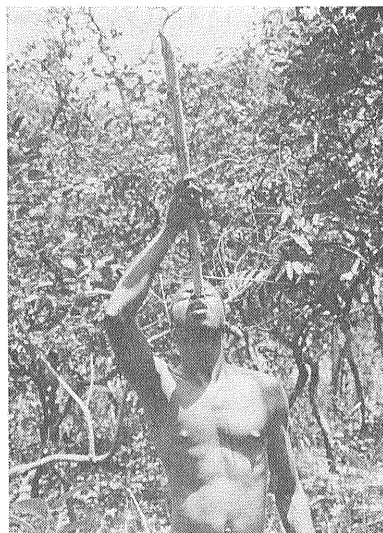
アフリカ大陸に棲む象は サバンナ地帯に主としてみられるいわゆるアフリカ象と西アフリカの密林地帯のマルミミ象とに区別される。アフリカ象は肩の高さ3.5m 体重7t 耳が大きく 爪は前が4本後ろが3本であるが マルミミ象は肩の高さ2m 体重4t以下 耳はまるく 爪は前が5本後ろが4本である。

アフリカ象は 雄雌ともに巨大な牙をもっているのにかつて 牙を目的とした狩猟によって 絶滅の危機に類したこともあったが 積極的な保護運動とそのたくましい繁殖力とによって 現在数は約30万頭と推定されている。これらは完全な女系群をなし 成長した雄象は群を離れて 孤独な生活を送るという不思議な生活態様をもっている。ウーマン・リブもこうまで徹底すると雄たるものは実に哀れでさえある。

雄も雌もけたはずれに大きな図体の持主だけに その食欲たるや実に変なもの 食べるために費やす時間は一日に16時間 そして餌を求めて一日におよそ44kmを旅するという。さらに不思議なことに その旅の途中で同族の白骨死体に出逢うと その骨を拾いあげては何処かにかくし 最後に必ず牙をかくすということである。象の墓場を発見することのむずかしさといひ このような習性といひ れわれにはなかなか理解できないことだが 象にとっては形而上的な何かであろう。百獣の王といわれるライオンが一日の三分の二以上を寝て暮すというのに 象という動物は実に神秘的な習性と行動の持主ではある。



第8図 マンゴ 3月下旬から4月中旬頃に熟する。



第9図 ドンゴ 密林地帯でしばしばみられる蔓の一種で新鮮な水を多量に含み飲料水として珍重されている。

動物王国として知られるこの国は また 蝶類の宝庫でもあり その地理的分布上 マダガスカルと印度洋上の島嶼を含むエチオピア地帯に属する。蝶類の多くは生態学的に季節形態型に入るので 雨期の蝶類は大型で色が濃く 乾期の蝶類は一般に小型で淡色である。これらは主として南部の密林地帯に密度が高く インドやオーストラリアに現存する蝶と同種のものやゴンドワナ大陸に生存していたと推定される昆虫の系統を引くものも含まれている。蝶類の分布密度がもっとも高いのは南部の密林地帯である。

タテハ蝶類に属するジャラクセスとシモトエだけでも30種類以上におよぶ多種多様の蝶の中でもっとも著名なものは アフリカの蝶を代表する大型のパピリオニドに含まれる パピリオ・ザルモクシスとパピリオ・アンティマカス 豹の排出物の上でしか捕獲することができないノビリス・ハドリラスとゼリカ そのほかシモトエ・サンガリス シモトエ・コチナタ テラコリユス ミロトリス アクラエア プロトクレア スマラダリス パラネス ジンガなどである。

蝶のほかにも多種多様の昆虫がいる。体長12cmもあるこがね虫科の昆虫 聖なる甲虫といわれている巨大なヘリオコプリス 危険な武器をもっている木食い虫など 数え挙げればきりが無い。しかしこれらの昆虫がもっとも活発に活動するのは夕刻近くであり とくに美しい昆虫は 人目につかない場所に潜んでいるので捕獲することはむずかしい。昆虫の世界でも美しくそして優雅なものは やはり 雑踏を避けているらしい。

猛獣や蝶ほど種類は多くはないが 蛇の世界も中々にぎやかである。咬みつかれたら3秒後には絶命まちがいなしという恐ろしい毒蛇 錦蛇など 人間に害を与えるものもいれば 人間に益するものもある。グリーン・スネークなどは害を与える方では名だたる蛇だし 錦蛇は食料として捨てがたい存在である。パンギの北東方に当るダマラの町では 錦蛇の燻製を一片100フラン(130円)で売っていたが 偏食しないことだけが取得の私も 錦蛇の燻製だと聞かされたときに 試食する気をなくした。

ふつう 錦蛇と呼ばれるものは 王蛇科に属し 錦蛇とボアの二亜科に区別され その種類は70以上におよぶ。これらは全世界の熱帯や亜熱帯に広く分布してはいるが もちろん 地域や生活環境などによって 種類や大きさも異なっている。これまでに知られている世界最大の錦蛇は 体長10.8mのアミネシキヘビであるが 体長

10mに達するものは稀であるといわれている。そういう大物がほとんど棲息していないのか あるいは 棲息してはいるが人目につきやすい所を避けているのか 蛇に興味のない私は知らない。

だが 錦蛇については 少々興味をそそられることがないではない。錦蛇が一度に100個の卵を生むことや種類によっては卵がかえるのに9カ月もかかることも不思議だし また 肛門の両側に後脚がイボ状か爪状をなして残っていることも 他の蛇にはほとんどみられない特長である。ボア亜科も決して一様ではなく 大はアナコンダの体長8mから 小はサンド・ボアの1mまで様々である。サンド・ボアなどはとても王蛇科に属する蛇とは思えないが 砂漠の地中を住とするこの蛇は 身体が小さいからこそ 水の乏しい環境での生活を全うすることができるのかもしれない。自然に生きるものは あくまでも 自然の意のままに そして それに順応して生きてゆく。これが己の生命を長らえる最高の生き方である。アラビア半島の砂漠にもオーストラリアの砂漠にも 前脚が短かく 後脚と尾が異常に長いカンガルーネズミがいる。このカンガルーとそっくりの身体つきをしたネズミをはじめてみる人は ほとんど例外なく その姿に興味をもつが この奇妙な身体つきをしたネズミがなぜに砂漠にだけ生きているのかを考えてみる人は意外に少ない。

カンガルーネズミの尾をちょっと注意してみると 禅宗の僧が法事の時に持つ払子に似て 付根から細くてやや固い尾の先端がふんわりと大きくなっている。この尾は 一見不必要に大きすぎるようだが 実は 長い後脚で大きくジャンプし 空中で方向を変える いわば方向舵の役目をしている。これは 襲いかかる敵の毒牙から逃れるためのかよわいネズミに授けられた宝物ではあるが 所詮このネズミは 砂漠に生きる多くの生物の餌食になる運命の持主である。その理由は体重の約75%が水分であり 乾ききった砂漠では この水分は誰の目にも魅力である。

自然がその美しくさと豊かさを保ちつづけている秘密は いつでもどこかで それを保つための自然淘汰が行なわれていることである。砂漠の植物にトゲが多いのは 外敵を寄せつけないためであり アフリカの大草原で突如として起こる火事は 地味を肥やして新しい生命の誕生を迎える。ライオンの餌食となる縞馬は 美しくそして温順だけに 哀れであるが もし 野生動物の世界で弱肉強食が行なわれなかったならば いかにも広大で緑豊かな大陸とはいえ アフリカの野生動物は 異常な繁

殖を遂げて 餌の完全な不足を来し やがて 滅亡する  
だろう。

動物も植物も生きるために適する場所を得て生命を永  
らえ そして いつの間にか人知れず息絶えてゆく。  
それは 自然の大いなる業であり。若い生命を生み育て  
る尊い糧となる。 自然とは いつの世もそうしたもので  
あり 自然の意に逆らうすべてのものを拒否する。  
美しい自然 きびしい自然 その中に立って 生きて  
いる自然をみつめ それと対話しつづけてこそはじめて  
自然の偉大さと美しくしさを理解することができよう。  
トゲをもつ灌木の一株 猛獣 毒蛇等々 それらのすべ  
てが自然との巧みな調和の中でこそ生きてゆけることを  
十分に知り そして 理解する心を失ってはならない。  
愛ほしむ人を愛ほしみ 仇をやる人に仇をやる それが  
汚れない美しい自然の生ける姿である。

水系の良好な発達 は 人や野生動物や昆虫や そして  
千差万別の植物に生きる場を与える一方 魚類の繁栄に  
ひいては人間の生活に 大きく寄与している。 魚の分  
布はほとんど全域にわたっており その代表的なものは  
角鮫 鯰 キャプテース モケレレ マリ ムベンガ  
ルアム ラ・パール サラ ラ・ナナ・バリヤ ラウク  
ラ・ウワンジャ ラ・コト テラピアなどである。

魚類も恵まれ 自然のおかげでおうように育つせいか  
概して大きく とくに 角鮫は 40~60kg 鯰は 50kg  
もある。 これらの中で最高に美味い魚は脂っこくて固  
い白身のキャプテースと白鯰であり これらのフライは  
賞味するに価する。



第10図 ツェツェバエのおもな分布地域概略図

猛獣や毒蛇などの恐ろしさも特筆ものであるが 嗜眠  
病を媒介するツェツェ蠅は最高の恐怖心をそそる。こ  
の病原菌をもっているツェツェ蠅に血を吸われたが最後  
こんこんと眠りつづけ そして 死ぬ以外にない。一  
般の蠅よりも胴体・羽根ともにやや長く 薄黄色と墨色  
の横縞模様を腹にもつこの蠅は 分布範囲が実に広く  
(第10図) 嗜眠病菌をもっていなくても 血を吸った  
相手に必ず何らかの異常を与える。 筆者もツェツェ蠅  
に血を吸われ 一時は絶望感におののいたことがあった  
が これについては後で述べてみたい。

近年 科学の発達によって ツェツェ蠅による死亡率  
は著しく低下したといわれているが 家畜数が人口に比  
較して少ないこと 家畜の飼育がツェツェ蠅の少ない北  
部地域で 集中的に行なわれているところを見ると ツ  
ェツェ蠅による人畜の死亡率はまだ高いのだろう。

一般の蠅の幼虫が汚らしい土中で育つのはまったく  
異なって ツェツェ蠅の幼虫は 母親の胎内で ぬく  
ぬくと育つ。 人や家畜を死に追いやる迎えられざる存  
在だけに その育ち方は実に氣にくわいが ツェツェ  
蠅以上に悪を 時には秘かに 時には得意気にまきちら  
す輩が得てしてはびこる世界があることを思えば あな  
がちツェツェ蠅だけを責めることは酷のような気もする。

果しもなく広がるサバンナの彼方に昇る太陽 その明  
るい光の中に浮ぶ蒼葺きの家のシルエット 豊かな水と  
光に育まれる緑と人の心 この大地には 文明諸国で  
すでに失なわれている あるいは失なわれかけている心  
と物とが満ちている。 だが この美しくしさがある限り  
その豊かな自然の中で れわれの想像をはるかに超え  
た何かが絶えず起こっていることは確かだ。 晴れ渡っ  
た空に浮ぶ一かたまりの白雲を真紅に染めて 大いなる  
夕陽がサバンナの果にゆったりと沈んで行く。 訪ずれ  
た闇に閉されたこの大地では もはや 美も善も悪もさ  
だかではない。 恐ろしいほどの星の光の下にあるのは  
静寂の中に埋もれた秘境だけである。 そしてそれは  
黄熱病 マラリア ツェツェ蠅などの恐怖にさらされ  
かつては「白人の墓場」と呼ばれた大地である。

### 中央アフリカ共和国の人

ホモサピエンスという一つの種に属する現存の人類を  
細かく分類すると 「哺乳類霊長目 真猿亜目 類人猿  
上科 人科に属する」ということになる。 これからみ  
ると 人間と猿とは切っても切れない縁があることが分  
かるが この類人猿上科には人と類人猿とが含まれる。  
類人猿と呼ばれる現存動物は ゴリラ チンパンジー  
オラウータン テナガザルの4種類であり アフリカ大

陸はこれらの類人猿の宝庫として知られていると同時に人類誕生の舞台として有名である。その舞台の幕あきは1924年であった。

1924年 R.A. ダート博士は 南アフリカのタウングスで6才ぐらいの子供の頭骨化石を洪積世前期の地層中に発見し アウストラロピテクス・アフリカヌスと命名した。この発見を契機として アフリカ東部および南部を主とする人類誕生とその進化に関する研究が急速に進み 1937年に コール・ラルセンによって タンザニアのエイシ湖東岸で上顎骨が発見されて メガントロプス・アフリカヌスと名付けられ 1959年には リッキー夫妻によって タンザニアのオールドヴァイ峡谷で発見された化石はジンジャントロプス・ボイセイと命名された

これらの化石については 当然 時代の検討が行なわれ アウストラロピテクス・アフリカヌスの年代が100万年前 ジンジャントロプス・ボイセイは カリウム—アルゴン法による年代測定によって 175万年前と推定された。このことは わずか35年の間に われわれの祖先の年代が75万年もさかのぼったことを示す。しかし1972年9月29日 南アフリカ共和国の首都ヨハネスブルグ発ロイターは 同市の化石人類学者フィリップ・トビアス教授が ヨハネスブルグの約48km 西方にあるシュテルクフォンテイン洞穴から 250万年前のものと推定される雌の猿人の頭骨化石を発見したことを報じた。これが事実ならば われわれの祖先の年代はさらに75万年も古くなる。

われわれの祖先の遺骸化石は上記以外にも各地で多数発見されており これらの研究によって 新人 旧人 原人 猿人とさかのぼる祖先の姿とその生活環境は 急速に明らかになってゆく。しかし たとえば 旧人が新人に直接進化したのか または 旧人の時代にすでに新人が現出して やがて両者の間に勢力争いが起こり遂に新人の時代に移り変わっていったかといったような問題の解決は そうたやすいことではない。

生物学における一般法則は「頂点に達した生物は やがて環境の変化に伴って 他の生物におきかえられる」ことを われわれに教えてくれる。人類もすでに生物学的にはその頂点をきわめ あるいは 退化の時を迎えつつあるのかもしれない。ホモサピエンスの時代がいつ終わり そして その後どのような生物時代が訪ずれるのだろうか。それは 遠い未来のことであり 今には誰にも分からない。しかし われわれは 自然の意のままに生きそして息絶えていった古い時代の祖先とは異なって その英知と手で 自己が生きるために必要な

環境と物とを作ることができる。神秘性と夢に閉ざされていた宇宙も もはや 人類の実際の行動範囲と化しつつある。そうしたことは より広くより豊かに生きるために当然必要ではあろうが 必要限界を超えた時 現人類の時代の終末を早めることも確かであろう。集団で物事を考え 計画し 決定し そして行動し 必要ある物を作る英知をもつ人類でありながら そうしたことをきわめて困難にするのも人類である。人類は進歩するにつれて脳も大きくなる。その脳がどこまで大きくなってゆくかは誰にも分からないし また 現状維持で終わるかもしれない。

次のような資料から これから先の人類の姿を想像することも あながち無駄ではなからう。

区分	脳容量	時代	名称
新人	1600cc	氷河期の末期	クロマニヨン人 上洞人 シヤンスラード人 グリマルデイ人
旧人	1300~1600cc	第三間氷期~ 第四間氷期	ネアンデルタール人
原人	775~1300cc	第二間氷期~ 第三間氷期	ジャワ原(猿)人 北京原(猿)人 アトラントロプス ハイデルベルグ原人 メガントロプス
猿人	400~700cc	第一間氷期~ 第二間氷期	アフストラロピテクス パラントロプス プレシアントロプス テラントロプス ジンジャントロプス

現在 アフリカの人種は 大まかに次の6型に区分されているが 種族数および部族数は実に多い。本誌第219号でも述べたように バンツウ族が100余の部族に分かれていることから これについては容易に想像できる。

### アフリカ人種分類

(河出書房：アフリカによる)

- [1] 黒人種型(メラノ・アフリカ人種型)
  - (1) スーダン型
  - (2) ギニア型
  - (3) コンゴ型
  - (4) ナイル型(ニロチック型)
  - (5) 南アフリカ型(パントゥー型)
- [2] ネグロロ人種型(ピグミー人種型)
- [3] コイサン人種型
  - (1) ブッシュマン型
  - (2) ホッテントット型



[4] エチオピア人種型—ハム＝セム語系

[5] 白人種型

- (1) 北アフリカ原住—ハム語系
- (2) 東アフリカのアラブ人(海岸部に定住)
- (3) ヨーロッパからの植民者
- (4) 東アフリカのインド人(全域に散在)

[6] 蒙古人種型(マダガスカル島)

これらの種族のうち マサイ ピグミー ブッシュマン ホットントットなどは一般に知られているが その他の種族についてはあまり知られていない。もちろん われわれとは直接に関係のない人種であろうから 詳しく知る必要もないが これらの4種族だけがとくに知られているのは 恐らく マサイ族は長身の典型的な草原(サバンナ)の民であり しかも 食料として必要最少限度の野生動物以外は絶対に殺さないこと ピグミー族はいわゆる小人であり ブッシュマンはアフリカ最古の民 そして ホットントットは 脂肪がたまって 臀部が異様につき出した珍しい体つきの持主であるからだろう。これらの種族は 第4図に示すように それぞれの属する型によって一定の範囲に分布してはいるが 各部族の分布をみると その圧倒的多数が東西方向を示し 地中海 北大西洋 紅海付近の部族は海岸線に平行 ガーナ共和国およびコートジボアール(象牙海岸)共和国地域の部族は南北方向を示す。このような種族および部族分布の方向性は 一体 何を意味しているのだろうか。

ほんの一時を中央アフリカ共和国で過したにすぎない私には もちろん その真の意味は分かるはずもないがあくまでもサバンナに生きるマサイ族 あくまでも密林に生きるピグミー族などの生活様式と生活の場を想うとき これらの分布が 各種族あるいは各部族特有の長い伝統に培われた生活様式と地形・気候およびこれらに関連する水系の発達状況・植生その他 諸々の条件との深い関係によって生じたと思える。ピグミー族は密林の民であり ブッシュマンは今はずでに砂漠の民と化し これらは 相互に立場を代えることのない 長い年月にわたって継承されてきたそれぞれの生活態様である。

中央アフリカ共和国の人口は 2,358,000人といわれているが 資料によって大きな差異があり 実数は確かでなく 次の部族によって構成されている。

バンダ族 バヤマンジャ族 ムバカ族 ザカラ族 ヤコマ族  
バカマジャ族 バノ族 ワダイ族 サラ族 ザンデ族 バンジ  
リ族 プラカ族 ピグミー族 ポファイ族 バヤカカ族 ドンジ  
族 ンボゴ族 ランバシ族 トボ族 デイドリ族 タレ族

ダバ族 バンギ族 ムパティ族 パンラ族

ピグミー族を除くすべての部族が 人種分類上 メラノ・アフリカ人種スーダン亜型に属し 各部族毎に 体形 顔付 肌の色艶がかなり異なっている。

この国の原住民もピグミー族であり 18世紀までは広く分布していたらしいが 19世紀のはじめ頃から イスラーム教徒の圧迫やアラブの奴隷狩りを逃れて 近隣諸国からこの国へ移住する人が増加するにつれて 次第に南下し 現在は コンゴ盆地の北端部に当る南部の密林地帯だけに住んでいる。バヤ族は 改宗を強く迫ったイスラーム教徒の圧迫を避けて チャドから移住して来た部族であり バンダ族は ソマリア北部の出身でスーダンに移住していたが 奴隷狩りを逃れて この国へ再移住した部族である。このように ピグミー族以外はすべて外部からの移住者であり しかも 各部族がそれぞれ独自の言葉と伝統・習慣を重んじているばかりではなく 各部族の人口が著しく異なっているので 総体的に コミュニケーションは十分とは見なしがたい。上記部族のうち東部と中央部に主として住むバンダ族と西部を生活圏とするバヤマンジャ族だけで 人口の約70%を占めており 人口比で第3位のムバカ族でさえ その占める割合はわずか7%にすぎない。したがって これら以外の20余の部族が占める人口は全体の約23%である。

総体的には女性の方が男性よりも若干多く 全人口の約40%は15歳以下らしい。低年層の占める割合がこのように高いことは 独立後12年という若いこの国の今後の発展にとって 大きな強みであり 何よりも勝る貴重な資源である。

宗教別の人口比は アニミストが約60% カソリックが約20% プロテスタントが約15% イスラーム教徒が約5%といわれている。改宗の強要および奴隷狩りという精神的・肉体的苦痛を強いる手段を通じて この国の人種構成および宗教別人口比にもっとも大きな影響を与えたイスラーム教徒が わずか5%の人口比を占めるにすぎないこと および ンデレ付近をほぼ南限として住んでいることなどは この国の宗教上および歴史上の変遷とその意義を知る上において注目される。

われわれにはなじみのうすいアニミストとはアニミズムの信奉者のことである。アニミズムとは ラテン語のアニマ(靈魂 氣息)を語源とする 心靈上あるいは宗教上の術語であり 生靈観または有靈観と訳されることが多い 宇宙のすべての生物・無生物および天然現象に靈魂があると信ずる思考方法である。

アニミズムは宗教の原初形態の一つであるとされているが 1899年 イギリスのR. R. マレットは 万物に生だけを認めて靈魂の存在を認めない原初宗教をアニマリズム（有生観）と名付け これをアニミズム以前のものであると述べている。

アニミズムが広く浸透しているせいかな アフリカ各地では ソルシエと呼ばれる祈禱師が現在もかなり活躍しているらしい。ソルシエの実力がどの程度のものかは幸か不幸か知る機会を得なかったが 「あるアフリカ女性がフランス男性に恋をしたが その男性には妻がいて結婚できないので 悩みぬいたあげく ソルシエにすがった。そのソルシエは 人形にたくさんの針を突刺して祈禱し その女性に15日間待つように伝えた。そしてそれから13日目に フランスにいたその男性の妻は 突如として 原因不明の病で倒れ それから2日後に 全身傷だらけで病院のベッドで息絶えた」という物語を知った時には 一瞬 寒気を覚えた。これは事実ということである。もっともソルシエの能力は こうしたことだけではなく われわれの想像をはるかに超越したものらしい。

ソルシエの祈禱によって 近代医学によって足の切断をいい渡された患者が元通りに治った話 生涯不治を宣告された病気が完治した話 麻酔薬をまったく用いず しかも 錆びたナイフと金槌だけで行なう脳外科手術を笑顔で受ける患者 こうした事実を知ると ソルシエの能力と力は無視できないし また 近代医学とは何かという疑問さえ浮ぶことがある。

私は 少年時代に「アジアのある土地で 原住民に慕われていた温厚篤実な日本人警官が 転勤命令を受けた翌日 原住民に首を切り落された。その理由は 自分たちを愛してくれた素晴らしい人物だから その土地に永久にとどまって欲しいと望む原住民の願から起こったことだった」という話を その事実をよく知っている人から聞いたことがある。いわゆる未開地と呼ばれる土地では 現在はそういうこともないだろうが 嫌われては殺され 好かれても殺されるということが すくなくとも過去にはあったことは事実だ。もっとも 好かれるあまり殺されるということは その人が 人格・容貌・智識・力などに一きわ秀れているばいりに起こったのであろうから 私などは好かれるがゆえに死出の旅路につく資格はなさそうである。

この国の人口の約90%は奴隷狩りを逃れてきた人たちであるといわれているが 不幸にして その魔手から逃れきれなかった人たちは われわれの想像も及ばぬ苦痛

を強いられ そして 信じられないほど多くの人たちが死を余儀なくされた。奴隷狩り時代の様相を詳しく書き連ねた書物によれば 奴隷商人によって 2千円ぐらいで買われた奴隷は アメリカでは 6万～6万5千円で売られたということである。奴隷の価格のこの異常な差は 輸送途中でかりに三分の一が死んだとしても 十分に儲かるよう計算された結果決定されたものらしい。

砂漠地帯を除いて アフリカで広く栽培されているものの一つに南京豆がある。その栽培によってアフリカの多くの国は経済的に恩恵をうけていることは確かである。しかし この南京豆が はじめは 売られて行く奴隷の船中での食糧として栽培されたものであることを知っている人が 現在 どれほどいるだろうか。

奴隷狩りを逃れて ようやくこの高原の国に定住した人たちにとっては 豊かな緑と無数の野生動物によって代表される大いなる自然に抱かれたこの地は 自由世界であったには違いないが それも束の間 やがて フランス植民地に生きる者として再び試練を受けることになる。

富者と貧者 文明に生きる者と自然の意のままに生きる者 両者の間には 正しく生きるということにおいては もちろん差別があってはならないし あくまでも平等であるはずである。このことはすべての人類が認識しそして確認し合って 「平等に生きる権利と義務を持つ」という鉄則を作った。れれは人類の人類たる所以である優れた智能と団結心 そして 必要なものをおのれの手で作ることができる創造力の結晶以外の何ものでもない。しかし そのような特権と智能とをもつ人類が 果たして その結晶をより大きくそしてより美しくする努力を真に続けているだろうか。

中央アフリカ共和国 この広大な大地とそこに生きる多くの人々は 私に一会一喜の心を失なわせなかったすばらしい心を ごく当りまえのものとして 私に示してくれた。この国を「人間の古里」と私が感じた所以は 美しい自然に育かれた人々の心の美しくさと豊かさを 短かい滞在期間ではあつたけれども 常に どこでも 肌で感じたことに他ならない。

（筆者は 鍼床部）